

まかい  
おうじょ

# 魔界王女

金眼のファルシア

立ち読み版

小説 上田ながの

挿絵 ピエール☆よしお



第一話

傲岸不遜な王女様

第二話

魔神ガレスの罠

第三話

雌豚王女

第四話

肉の宴に堕ちる王女

## 登場人物紹介

Characters



**ファルシア＝メルル＝  
カナール＝レリアリア**

魔界六名家の一つレリアリア家の娘。  
自尊心が非常に強く自分以外のものは  
すべて自分に傳くべきだと思っている。



ヤギリトウコ  
**夜霧東子**

転生六家の一つ夜霧家の当  
主。心優しく朗らかな性格で  
ファルシアをサポートする。



**エリス＝  
クライトン＝  
シキシマ  
敷島**

東子と同じ学園に通う  
ハーフの少女。感情を  
あまり表に出さない。



**アレイア＝  
ミール＝  
ソレイユ**

魔界六名家の一つソ  
レイユ家の女悪魔。



校舎に戻ることはできない。張り巡らされた結界は、ガレスが作り上げたもの。たかが人間に破れる様な代物ではない。

「どうしてなんですか、ファルシア様!!」

叫んだところで返事はない。

（どうすればいいの？ こ、こんなの……私なんかじゃ……どうすることもできないよ……ふぁ、ファルシア様……）

少女は呆然と校舎を見て立ち尽くす。悪魔によつて生み出された結界が相手では……。

「ファルシア様……」

もう一度主の名を呼ぶ。無力感だけが、少女を包み込んでいった。

\*

「しかし意外だったな。まさかお前が人間如きを救うとは……。どういう心境の変化だ？」  
口を開くガレスは、本気で驚いている様にも見える。あの場面でファルシアが自分ではなく東子に転移術を行使するとは、まったく予想していなかったのだろう。

「……東子一人残ったところで、何の役にも立たないでしょ……。その点、私ならあんたを八つ裂きにして、ぶっ殺すこともできるからね」

そんな敵に対し、悪魔少女は常の如く強気な言葉を返す。ただし、全身からはほとんどの魔力が奪われてしまっていた。ただ立っているのさえ辛い。

「なる程……確かに、人間一人残しても、俺を倒すことはできないなあ。だが、お前に俺

を八つ裂きにできるとも思えないぞ。なあっ！」

笑いながらガレスは刀痕と切り落とされた右腕を再生させ、魔力弾を撃ち放ってきた。

「うああああっ！」

避けることすらできない。魔力弾の直撃を受け、何度も屋上に肉体を叩きつけられた。

「どうした？ この程度も避けられないのか？ これでも十分手加減してやったんだぞ」

「……う、五月蠅い……く、口を開くんじやないわよ。く、臭いから……」

走る激痛で立ち上がることもできなかったが、それでも敵を睨みつけ、弱みを見せない。

（ま、不味いわ……予想以上に魔力制限が効き過ぎてる。この結果……何日もかけて作つたものか……私の魔力に対して特化し過ぎてる）

ただ、弱みは見せずとも、自分の置かれた状況ははつきり理解していた。

ファルシアの魔力のみを限界ギリギリまで抑える結果。たった一日で作れる様なものではない。

（え、エリスか……わ、私がこの生徒になつてから、ずっとこの結果を……）

彼女の取つていた不審な行動を思い出す。眠たげな眼差しのまま、こちらを見つめるエリスの姿に、ギリッと悪魔少女は奥歯を噛んだ。

「まだそんな口をきくか……。お前分かつてるのか？ この状況……完全にお前は負けたんだぞ。そんなことも理解できないのか？」

ヘラヘラとガレスが笑う。そんな敵に対し、ファルシアはフンツと鼻を鳴らすと、口元

に不敵な笑みを浮かべてみせた。

「理解？ ま、負けてもいいのに、な、何を理解すればいいの？ あんたみ、たいなぞ、ここに……私が、ま、負ける筈がないじゃない！」

強がりではない。が、敗北を認めることなど、ファルシアの矜持が絶対に許さなかった。たとえ殺されたとしてもだ。

「……なるほど、負けてないか……この状況で？ くく、分かっただろう。だったらお前に負けを認めさせてやるよ。完全な敗北って奴をな」

ニタツとガレスが笑う。同時に肉達磨の身体から、幾本もの触手が伸びてきた。緑色をした肉の塊がゆつくりとファルシアの視界で揺れる。

「今からこいつでお前に敗北を教えてやる。お前をこいつでイかせてやるよ。どうだ？ 蔑んできた男にイカされる。これ程の敗北はないだろ」

揺れる触手の先端部は、本物の肉棒の様に膨れ上がっていた。本物の亀頭の様に割れ目まであり、そこから半透明の液体が溢れ出している。噎せ返る様な腐臭が、辺りに広がっていた。

「そ……そんなもので私を？ 無理ね。あんたなんかイカされるなんて……絶対に有り得ない」

一瞬この男に犯される自分の姿が脳裏に浮かぶ。想像するだけで死にたくなる。だが、ファルシアはすぐにその想像を打ち払い、いつもの様に強気な言葉を返した。どんな状況

でも絶対に弱みは見せない。それが誇り高きレリアリア家当主としての務めだ。

「……お前ならそういうと思った。だから……十分だ。十分でお前をイかせてやる。十分でお前がイかなかったら、俺の負けだよ。お前を解放してやる」

そんなことを提案してくる。少し意外だった。ガレスにとって今の状況は最高に優位なものである。わざわざ譲歩する必要などない。容赦なくファルシアを殺してしまえばいいだけなのだ。

（……ホント愚かな奴ね。後悔させてやるわ。八つ裂きにしてやる）

少女悪魔は笑う。

「ただ、お前がもしイってしまったら。その時は、お前をたつぷり犯してやるよ。くく、俺のペニスでお前のマンコをたつぷりな。くふふ、処女なんだろう？ 匂いで分かるぞ」

こちらの笑みに気付いているのかいないのか、スンスンッとわざとらしく匂いを嗅ぐ真似をする。その姿がより不快感を誘った。

「いいわよ。イったらね」

仰向けに倒れたまま、まともに動くことさえできないというのに、ファルシアはどこまでも尊大な表情を浮かべる。

（この私が、あんたなんかにかされる筈がないわ）

絶対的な自信。危機になればなる程、ファルシアの中でそれは膨らんでいく。

ガレスなどに肉体に触れられる——その事実を、自信が上書きしていった。自信が現実



から目を背けさせる。

「その言葉、忘れるなよ」

ニタリツとガレスが笑う。同時に数十本の触手が、小柄な身体に纏わりついてきた。

ぐちゅ、ちゅぐう……。

触手表面を覆う粘膜がワンピースに密着する。途端に液体が服に染み込み、生温かく、気色悪い感触が肌に伝わってきた。勿論服に先端部を擦りつけるだけでは終わらない。二本、三本と、触手は次々と小さな肢体に絡みついてくる。細い腕を締め上げる様に、触手が螺旋を描き出す。剥き出しになった二の腕と肩に、ねちゃりとした感触が触れた途端、反射的に少女悪魔はピクリツと身体を震わせた。

触手によって腕が左右に引っ張られ、両足が大きく開かれる。敵の前で作られる大の字。あまりに無様な姿だった。

「お？ 何だ？ もう感じてるのか？」

「馬鹿なこというんじゃないわよ！ この程度で感じる筈がないでしょ！」

舐められるのは我慢ならない。キャンキャンと啼く子犬の様に、敵の言葉に噛みつく。

「まあそうだよな。まだ始まったばかりだってのに、もう感じてたんじゃ、面白みも何もないからな。ほら、まだまだいくぞ」

言葉通り、更に幾本もの触手が肉体に取りついてきた。足首からニーソックス、太股へと蠢いていく。黒いソックスが濡れそぼち、肌に密着する感触が気持ち悪かった。

「そ、そこはっ！ き、汚いもので触るんじゃないわよ！」

身体に纏わりつく触手も止まらない。服の上をうねりながら、胸元にまで達すると、そのまま先端部を小さな乳房に押しつけてきた。小さな胸が、肉頭によって形を変えられていく。当然胸元にも粘液が染み込んでいく。

「気持ち悪いのよ。っ、こんなことで感じる筈なんかないんだから、とっとと放しなさい！」  
覚えるのは不快感だけだった。こんなことに意味などない。だからやめるとガレスに伝えるのだが、敵が触手の動きを止めることはなかった。それどころか、割れ目の部分から触手の先端が花の様に開き、そこから蛇を思わせる二股の舌が伸びてきた。

「な、何をつ？ くんっ！」

びちゅっ！ くちゅ、ちゅぐうっ！

伸びる舌が服の上から乳房を舐め始める。淫らな音を立てつつ、丸みを帯びた胸元を何度も先端で撫でてきた。それも一本だけではない。数本の触手が同時に同じ行動を取る。

「くっ！ くんっ！ くあぁっ！」

ツンツンと突く様な動き。擦りを受けている様な刺激が走り、ファルシアはピクツピクツと身体を震わせた。思わず声も漏れる。

「おいおい、声が漏れてるぞ。喘いでるのかぁ？」

「そ、そんなわけではないで——んあっ！」

反論しようとした瞬間だった。肉触手先端部が、スカートの中に潜り込み、ショーツの



敏感部に走る刺激。仰向けに倒れたまま、腰を反射的に突き出してしまった。この反応

ちゅずっちゅずっちゅずっ！

陰部をガレスに責め立てられ、羞恥以上の屈辱が広がっていった。

「う、五月蠅い。黙りなさいっ！」

「これだからお嬢様は……。だが、それがいい。ほら、もっと気持ちよくしてやるぞ」

「き、汚いので触るんじゃないわよ！」

ぺちゅっ！ くちゅっ！ ちゅぶるうっ！

何本もの舌がショーツ内部に入り込み、秘裂をなぞる様に舐め始める。割れ目を押し開き、ピンク色の肉襞を先端部で何度も突いてきた。

「んくっ！ ふっ！ くふうっ！ ふうふう……」

感じない。絶対に感じてはならない——少女悪魔は必死にそれを自分自身にいい聞かせ続けるのだが、与えられる愛撫に、荒い吐息を我慢できない。

「何だか頬が赤いぞ。それに、息も荒くなってきた。少し感じすぎなんじゃないか？」

ニタニタとガレスが笑う。

「だ、だから、感じてなんつ——くあっ！」

反論をしようとした途端、舌先が淫核を締め上げてきた。一瞬思考が停止してしまう。相手は敵だというのに、隠しようもない心地よさを感じた。爪先が痙攣する。

「くっ！ あっ！ くふっ、ふんんっ！」

（な、何を、何を感じてるのよ！ 耐えなさいよ！ こ、ここで感じたら、この、この肉達磨なんかに犯されることになるのよっ！）

股間部が熱く湿り出す。下腹部が疼く様に熱い。全身が火照る。そんな自分が情けなく、何度も身体を叱咤した。

だが、そんな少女悪魔を嘲笑う様に、触手達は服の中にまで潜り込んでくる。

「な、こ、このっ！ 私の服が伸びちゃうでしょ！」

熱い身体から分泌される汗を、触手に吸引されてしまう。柔肌が千切られそうな程に引

っ張られていく。汗と触手の粘液が混ざり、絡みあう。

「んあっ！ だ、だから、や、やめなさいって……はあはあはあっ！ す、吸うなあっ」  
どんな悲鳴も届かない。脇を——ピクッ！ 首筋を——「あっ！」 胸元を——ジュンッ！ 余すところなく、触手が唾液塗れに変えていく。

ちゅずっ！ ぶじゅずっ！ ちゅぐう……。

熱く火照っていく身体。溢れ出す汗と愛液が止まらない。舐められることが気持ちいい（違う。感じない。感じる筈がない。穢されるのよ。ガレスなんか穢されちゃうのよっ！）考えるだけで屈辱に全身が震える事実を必死に思い出す。その瞬間——。

「んひっ！ ひあっ！ あっあっあー!!」

ぶちゅぐっ！

触手がワンピースの中で下着をずらし、直接乳頭に舌を這わしてきた。キュツと舌先で乳首を締め上げてくる。その途端、必死に陵辱に対して抵抗し続けてきた堤防が決壊した。少女の悲鳴が木霊する。

「……なるほど。ファルシアさんはおっぱいを責められるのが好きなのか」

その姿にガレスが楽しそうに呟いた。

「そ……そんな、こと……」

耳に届く敵の言葉に、思わず少女悪魔は顔を真っ赤にし、否定の言葉を吐くのだが、今までとは違いどこか力ない。

「否定しなくてもいいんだぞ」

ちゅぶつ、ぶじゅぶつ！

「んっあつ！ ちよ、や、やめっ——あっあっあっあんん……」

甘い悲鳴を漏らすファルシアを嘲笑う様に、触手は集中的に乳頭を責め立て始める。勿論、股間部の肉紐も止まらない。

ちゅぶつ、ぬちゅうっ！

どこまでも執拗な動き。先端を押しつけられ、舌先で齧られるたびに吐息は「はあはあはあ」とより荒くなっていき、ピクピクと身体は何度も震えた。官能の波が、津波の様に何度も打ち寄せる。

（ど、どうしてよ。な、何でこんな奴なんか……お、おかしい、絶対何か変なおっ！）

下腹部が熱くなり、子宮が疼く。止まらない愛液が、触手と混ざりあう。刺激を与えられる程、全身が汗に塗れる。金目の猫目は潤みを帯び、口は半開きになっていた。

「ふくっ！ なん、で、何でよ……あっあっ!!」

触手に絡みつかれた淫核が、痛々しい程に勃起する。キュッキュツと舌先で締め上げられ、扱き上げられると、何度もファルシアの肉体はバネでも入っているかの様に跳ねた。肉体と意識が、触手によって剥離させられていく。感じるな、感じる筈がない——と何度も自分自身にいい聞かせても、肉体は触手の責めに心地よさを覚え、自分でも意識せぬままに空腰を振ってしまう。止めることのできない甘い悲鳴が溢れ出した。

（さけ、裂けるっ！ 私の口が裂けちゃうっ！）

二本のペニスが内側から押され、プクツと両頬が膨らむ。閉じることのできない口端から、だらだらと大量の唾液が溢れ出した。

「すげっ！ マヌケな顔だなあ……うあつ、もっと舐めてくれよ」

魔力に影響されているのか、異常な状況も少年達はすんなりと受け入れ、ファルシアの肉体に斟酌することなく、無理矢理腰を振り始めた。

ぶごっ！　じゅぶご……ぶじゅごっ！

「おごっ！　ごっかか——んっ——!!　ふぐっ、ん……おっおっ……」

二本のペニスが交互に喉奥を突く。そのたびに目の前が真っ白に染まった。亀頭と口腔粘膜が混ざりあう。ぬちゃぬちゃと口腔内で粘糸が伸びているのが、分かってしまった。食道まで届きそうな程に肉棒を押し込められ、吐き気まで湧いてくる。それでも勝手に動き続ける肉体は、肉棒に舌を絡め、カリ首を締め上げる。無様に広げられた口唇で、肉茎を扱き上げた。二人の肉棒を掌で包み、先走り汁と唾液を塗りたくる。

（く、くさつい。臭くて、不味くて、く、るしい）

肉先が喉奥を叩く。食道を亀頭で塞がれる苦しみに思考が揺らいだ。

「おい、おいひっ、おひいの！　おっ……おんん……も——カハッ——もっほ、もっほ  
づいでええっ！」

だというのに、口は勝手に男達を求める。



「何だよそれ。そんなにチンコが好きなのか？」

この求めに男達は興奮を高め、より激しく腰を振り始めた。

じゅごっ じゅごっ じゅごっ

「ふぐっ！ むぐう。ふっ……も、もっほお、おぐに……ふごっ ぶごっ ぶごっ——!!!」

玩具の様に小さな顔が前後に振られる。ピストンのたびに肉棒は硬度と熱気を増していく。あまりに喉を突かれ、まなじり 眦には涙さえ浮かんでしまった。ビクビクと震える肉棒。

じゅぽっ じゅぽっ じゅぽっ

「んぽっ ンぽっ ンぽっ ンぽっ ンぽっ！」

更に激しく顔が前後に振られる。そして――。

「うあっ……で、射精るっ！」

「俺もだっ！」

二人の男子生徒達が同時に限界を告げ、

どびゅっ！ びゅぶるっ！ どっびゅるるうっ！

「んぶえっ！ おぶっ——んっ、で、つて……んんん!! んふっ！ ふぶっ、んぶぶう

っ!! んぽっ、んもおおおっ!!!」

（で、射精てるっ！ 私の口の中に、人間なんかの汚い汁が射精てるううっ!!）

口腔内に濃厚な白濁液が撃ち放たれた。小さな口など一瞬で埋め尽くす程の量。まるで熱湯を注がれているのではないかと思う程に、口の中が熱い。同時に耐え難い程の臭気ま

で、広がった。口端からビュブルツとザーメンが溢れ出す。

（不味い。汚い。汚い汚い汚い汚いっ！）

あまりの嫌悪に、ぶつぶつと鳥肌が立った。

「うあっ！ サイコー」

「これがフェラかあ」

ファルシアとは対照的に、少年達は本当に気持ちよさそうな表情を浮かべると、じゅぶつと肉棒を口腔内から引き抜いた。

「うおえっ！ げ——げぼっ……か、かはっ……げろお……うえええっ！」

自由になる口腔。途端に金眼の悪魔はたっぷり注がれた白濁液を吐き出そうと何度も咳き込んだ。

「駄目。しっかり飲む」

しかし、そこにエリスの命令が飛ぶ。

「そうだぞ。折角の精子が勿体ないだろ。ほら、ちゃんと口の中でぐちゃぐちゃ掻き混ぜたりして飲めよ」

少女の言葉に男子生徒も続いた。

（だ、誰がそんなこ——）

「ん……んじゅ、んちゅつ、んじゅ、ぐじゅう……」

命令を聞くいわれなどない。が、肉体は勝手に動き出してしまふ。媚びるような上目遣



いを男達に向けながら、口腔に溜まった白濁液をぐちゃぐちゃと掻き混ぜ始めた。

ぐちゅぐちゅ……にちやつ、ぐちやあ……。

頬を膨らませ、舌で白濁液を絡め取る。同時に口を開き、如何にザーメンが口腔内に溜まっているのかを見せつけた。口の中で粘液が糸を引いている。

「い、いただきまひゅ……」

(こ、こんなの飲むなんて……)

許容できる筈がない。しかし、肉体は止まらなかった。

ごきゅっごきゅっごきゅっ。

喉が動く。食道に熱液が流れ込んで来るのを感じた。胸元が熱くなっていく。喉奥に濃厚汁が絡む感触が気持ち悪い。

「うえ……う、うぷっ……げ、げぷうっ……」

出てしまうげっぷ。ザーメンの臭いが不快だった。

「おいおい、随分美味そうに飲むもんだなあ。ほら、感想を言ってみろよ」

勝ち誇った表情で少年が笑う。

「あ……ご、ごちしようさまでひた……げぷっ……お、おいひかったれしゅ……」

上手く口が回らない。

(こ、この私が……た、たかが人間なんか……)

屈辱のあまりにブルブルと身体が震えた。

「立場が分かった？」

そんなファルシアに、エリスが言葉を向けてくる。眠たげな顔が腹立たしい。

「だ、黙りなさい……。あ、あんたこそ、自分の立場を理解しなさいよね。私にこんなことをして、無事で済むとは絶対に思わないことね」

精液を口端から垂らしながら、少女を睨む。するとエリスは珍しく笑みを浮かべた。

「まだ分かってない。なら、もっと屈辱を与える」

パチンツと彼女は指を鳴らす。すると、射精を終えた男子生徒達がまるで操り人形のように動き出す。かと思うと、こちらの腰を掴み、無理矢理引き上げてきた。犬の様な四つん這い体勢を取らされる。

「な、何をっ！ 放しなさい！ 放すのっ！」

が、勿論その言葉は届かない。男達はファルシアの言葉を受け流し、突き上げさせた下半身のスカートを捲り上げた。そのままショーツに手をかけ、それを引き裂く。

「やめなさいっ！ 本当に殺すわよっ！」

尻尾の生えた白く艶やかな、張りのある尻が人間達の前に晒される。呼吸に合わせて蠢く尻肉。衣装に隠された乳房が、下向きになったことで僅かに大きくなった様に見えた。

プライドの高い金眼の魔神にとっては、耐え難い程に屈辱的な行為。だが、それだけでは終わらない。少年達は白い尻に手をかけ、無理矢理左右に押し開く。桃色の肛門が、人間達の眼前に映り込んだ。

「いやっ！ 見るなっ！ 見るんじゃないわよ!!」

ヒクヒクと震える小さな菊座。そこに男達の顔が近付く。鼻息が届くのが分かった。

「たっぷり流し込む」

そんなこちらの様子を眠たげでありながらどこか楽しげに見つめつつ、エリスが呟く。彼女の手には、いつの間にか注射器の様なものが握られていた。中には透明な液体の様なものが入れられている。

「な、何をするつもり……」

ソレが何なのか、ファルシアはすぐに理解した。だが、認めたくはなく、反射的に問いかける。しかし、エリスは答えない。無言のままこちらの背後に回り込んできた。

「や、やめなさい。やめるの。いい、今ならまだ許してあげるから。だからやめなさい。あ、あんただってまだ死にたくはないでしょ……」

必死にファルシアは敵の行動を止めようとした。

「……お前は私から逃げられない」

冷たいエリスの言葉が届く。

悪魔少女は必死に身体を動かそうとした。尻尾が揺れ、僅かながらに腰も動く。とはいえ、本当に僅かな動き。艶かしく揺れ動く腰は、まるで男達を誘っている様にさえ見えた。

「浣腸」

短く間拔けな単語を口に出す。そのまま注射器の先端部を、菊座に密着させてきた。

「ひっ！ つめたっ！」

伝わってくるのはガラスの冷たい感触。反射的にピクツと腰が跳ねる。勿論、密着するだけでは終わらない。

じゅぶっ！ じゅぶぶぶぶっ！

ゆっくりとした動きで、直腸内にガラスの容器が潜り込んできた。

「うひっ！ こ、これ以上は許さないわよっ！ うあっあっあっ！」

腸内に冷たい異物感が広がる。思わず悲鳴を上げてしまった。

「……無様に汚物を撒けばいい」

浣腸器が腸壁を擦り上げる。冷たくエリスがいい放つ。

「だ、だめっ！ そ、それだけは、それだけはやめて、やめてえええっ!!」

想像するだけで身が引き裂かれそうな行爲だった。流石のファルシアも悲鳴を上げてしまう。だが、敵にこちらの懇願が届く筈もなく――。

ずじゅっ！ ぎゅじゅずずうっ！

「うほっ！ ほおおっ！ は、はいってくっするっ！ 冷たいのが、私のお腹に広がるうっ！」

浣腸液が直腸内に流し込まれた。冷たい液体が下腹部に広がっていくのがはつきりと理解できる。肛門が、キュウツと窄まり、太股が震えた。

「あっ、はあああっ！ んあああっ！」





そんなこちらの態度にエリスは笑った。

「おひっ！ ひんっ！ ひんんっ！ くひっ！ い、いぐっ！ わだひひぐっ!! んい  
いっ、い、いけないっ、いけないのおっ!! あーあーあー、いけない! いげないい  
いっ」

トイレの個室前には男子生徒達が列をなす。彼らは個室に入ってくるなり、百円を貯金箱に入れ、ファルシアを犯した。

じゅぽっじゅぽっじゅぽっ——と生徒達は容赦なく腰を振る。激しいピストン運動。小柄なファルシアの身体など簡単に壊されてしまうのではないかという程の勢いだった。

「まだ、まだでってる!! あーあーあー! ま、また、た、たくしゃん、わ、わたひの膣中にじゃーめんでってるのおっ!! あづっ、あづい! 身体があづいのお」

一体どれだけの白濁液を膣中に流し込まれたのか? ファルシアには分からなくなっていた。既に子宮から膣道は白濁液で満たされてしまっている。新たな肉棒が挿入されるたび、前に流し込まれたザーメンがビュッビュッと飛び散った。

「あへっ、へあっへあっ、へあああっ!! お、おーおーおー」

壊れたスピーカーのような喘ぎ声を漏らし続ける。腰振りを、時間感覚を狂わされた悪魔少女の肉体はまるで永遠の様に感じてしまっていた。ワンストロークを一時間程に感じる。それがまた快楽を高めた。エリスによって敏感にされてしまった肉体は、膣壁越しに

肉棒を感じているだけで、どうしようもない程に愉悅を覚えてしまう。肉棒が膣内に存在するというだけで、愛液が失禁でもしたかのように溢れ出す。

「と、とまるっ！ い、イクのがとま——んひっ！ で、でってる！ また、射精されてるうっ！ イけない！ あーあーあーあー、いけないのおおおっ！」

だというのに達することができない。たっぷりとお腹の中に牡の吐き出した熱液を感じているというのに、昂る肉体の快楽は絶頂直前で止まってしまう。

「イきたいなら素直になれ」

そこに向けられるのは嘲笑うかの様なエリスの言葉。

「ち、違うッ！ い、イきたくなんな——んひいいいっ！ い、いぎだくなんがないっ!! いぎだぐなん——おほっ、ほっほっほああああっ!!」

ずぶじゅぶうっ！ ぶじゅぽおっ！

勿論ファルシアは自分の欲求を認めない。否定の言葉をエリスへと向けるのだが、その間にも新たなペニスが入入されてしまう。一瞬視界が真っ白に染まった。

「うああっ！ サイコー！」

ファルシアの状態に陵辱者は斟酌など持たない。自分の本能のままに腰を振る。

「きったっ！ また来たあ！ だっめ、も、もうとま、止まって！ だっめなおっ！ い、いけないのはイヤなおっ！ ひーひーひー！ い、いけないいっ！ いけないいっ！」  
無限地獄の様だった。肉体は昂っているというのに、絶頂感だけがしぼんでしまう。思



考回路が焼き切れそうな状態だった。

（いぎだい！ いぎだいの……ちが、い、いぎだくなかないっ！ に、人間なんかには、い、いぎだくなかないっ！！ でも、いぎだっ——ちが、いぎ、いぎだぐないのおおっ！！）

焦燥感ばかりが募る。絶頂を求める心と、魔神の矜持<sup>せめ</sup>。二つの感情が闘<sup>せめ</sup>ぎ合い、小さな肉体を責め立てた。

本能が達したいと悲鳴を上げる。壊れてしまったのではないかというくらいに、全身が小刻みに痙攣していた。同時にファルシアは無意識のうちに腰を振り始める。男のピストンに合わせるように、より深くまで肉棒を咥え込んだ。

「ちがつう！ こんな違うのにつ！ 殺すのに！ お、お前達なんか、か、簡単にこ、殺してやれるのにいつ。だつめ、い、いいのっ！ いいのおっ！！ だ、けど、い、いけないつ！ いいのに、駄目なおっ！！」

自分でも何を言っているのか分からない。

ペニスによって与えられる快楽は心地いいのに、達することができない状況はあまりに辛かった。快楽が大きければ大きいだけ、達することのできない苦しみが増していく。

「素直になれ」

エリスの言葉が心の奥深くにまで突き刺さる様だった。

（こ、このままじゃ駄目だ。何もできない。狂う。くるっじゃうう！！ このままじゃお、

おお、おかしくなる。おがしくなっちゃうのお!! い、いっそそれ、それぐらいなら……)  
敵の言葉に促されるように心が揺らぐ。このままイク事のできない苦しみを味わい続け  
れば、本当におかしくなってしまうかも知れない。壊されてしまえばこの状況を脱するこ  
とも、エリスを抹殺することだつてではしない。そんな事態に陥るくらいならば……。

「だつめっ! か、考えるなっ! 考えちゃだ——ふひっ! あへっ! あへっあへっあ  
へえええっ! 違うッ! いかないっ!! 私は、い、イク必要なか——ひっ! イケナ  
イっ! いげないのおっ!!」

相反する感覚が心を焦がす。悪魔少女は何度も身をくねらせた。そこに追い打ちをかけ  
るように更に白濁液が注ぎ込まれる。肉棒が引き抜かれると、圧力で噴水の様にピュッピ  
ュッとザーメンが膣口から飛んだ。勿論、集まった男達はそれで終わりではない。すぐさ  
ま次の男が現れ、ファルシアの膣口を塞いだ。

「まった、まだはいつでぐるっ! こ、こわれるっ! わ、わらひがこわれるうっ!!」  
金眼が見開かれる……。

「こほっ！ ほごっ！ か、かひっ……は、ごおっ——んごおっ」

（おぼ、れるっ！ ザーメンで溺れるうっ！）

多過ぎる射精に、息が詰まる。鼻の穴にまで白濁液は逆流し、ビュボツと飛んだ。口腔内が焼ける様に熱くなる。与えられる苦しみと屈辱。が、今回ファルシアが覚えた感覚は、それだけではなかった。

（何なのこれ？ 何で？ この味……美味しい？ せ、精液が何でこんなに美味しいの!？）

味覚を刺激する白濁液の味に、思わずファルシアはうっとりとし、瞳を細める。口腔粘膜に絡みつくザーメンの味は、これまでファルシアが食べてきたどんなものよりも甘美な味でした。

（ど、どうして？ こんな……）

完全に悪魔少女は狼狽する。落ち着きなく視線を辺りに散らし、救いを求める様な視線をエリスにまで向けてしまった。

「……ご褒美っていった」

視線に気付いた敵は、簡潔に答える。

「たっぷり飲んでいい」

わざわざ耳元で、少女は小さく呟く。

「だ、だが、こ、こんな……もほっ、の、むきやあ……ぶふっ！ んぶっ！」

敵にいわれるがままになることなど、レリアリア家当主としての誇りが許さない。だから口腔内に白濁液を溜めたまま、敵の言葉を拒絶した。が、吐き出すことは何故かできない。

（は、吐き出せ！ こんなものはきだ——）

「ふごっ！」

ぶじゅごっ！

必死に吐き出す様に自分自身にいい聞かせていたのだが、その途中で新たな肉棒が口腔内に突き込まれた。

「ぶぽっ！ おぼおっ！」

圧力で口端から精液が押し出される。

（あ、もったいな——つて、何を考えて……んあ！ また、また射精るっ！ 口の中につ！）  
葛藤をしている暇さえ与えてはくれない。やはり肉棒は口腔に入った途端、どびゅどびゅと射精を始めた。更に口腔に白濁液が溜まる。

（んぶっ！ あ、溢れる！ ザーメンで口が溢れるっ!! は、吐くの……吐くのよおっ！）

ジュブルツと引き抜かれる肉棒。その際も必死に零さない様にしてしまう。

「吐き出すことはできない。勿体ないから」

そこにエリスの言葉が向けられる。やはり必要最小限の言葉しかいわないが、それだけで彼女が何をいいたいのかくらいは理解できた。

「じゅ、じゅふを、つ、つふあつたふあね……は、はひだはへないひょーに」

言葉を発するたびに、口腔内の白濁液がボコボコと泡を立てる。

「おらっ！ 敷島さんばかりに意識向けてるんじゃないやねっ！ まだいるんだぞこっちは！」

「おぼっ！ ぶぼおっ！」

そこに更に追い打ちをかける様に突き込まれる肉棒。そして射精――。

喉奥まで精液に埋め尽くされ、本気で呼吸ができなくなる。

「おぼっ！ おっおっおっおっおお……」

ファルシアは天井を向き、口を思いきり開きながら、何度も苦しい喘ぎを漏らした。

（駄目、く、苦しい。で、でも、ど、どうして？ この味が、我慢できない）

苦しみると、甘美な味。二つの相反する感覚がファルシアを襲う。

「何やってるんだよ。もう限界なのか？ だったら早く飲めよ」

既に口腔は限界であり、これ以上精液を入れられない。当然肉棒を咥えられる筈もなく。

男達から不満の声が飛んだ。

（う、五月蠅いっ！ 黙れっ！ 人間如きがこの私にさ、指図をするなあっ！）

反発心が膨れ上がる。ただ、それと同時に別の意識も心に生まれ始めていた。

（こ、このままじゃどうすることもできない。な、なら、いつそのことを飲んで……）

たかが人間如きの精液では、ガレスの時の様な効果は望めない。とはいえ、これまで身



体中に注がれた精液の量は尋常ではないのだ。ここで口に入れられた精液を取り込めば、結界を破るくらいの力を取り戻せるかも知れない。

「飲まないの？」

無表情の癖に、どこか勝ち誇った様な風情を浮かべるエリスの言葉。ファルシアにとっては本当に気に喰わない顔だった。

（い、いいわよ。飲んでやるわよ。こ、後悔させてやるんだから！ こ、この私を虚<sup>こ</sup>仮<sup>け</sup>にしてくれた罪を、思い知らせてやる！）

敵意が魔神に決意させる。

「んぐっ！ んぎゅっ！ んぐうっ！」

ゴキユッゴキユッゴキユッ！

喉を鳴らし、牡汁を食道へと流し込む。ゼリーの様にプルンツとした触感が、胃の中に広がっていくのがよく分かった。全身が精液の熱気で熱く火照る。

（あ、ああ……美味しい……）

堪らない。我慢ができない。唾液が溢れ出す。

ドグンッ！

「こひっ！ ひっ！ ま、またっ、お、おつきくなつて——んぶっ！ ぶふうっ！」

飲み干すと同時に、再び子宮内の卵が疼いた。ビクンツと全身が痙攣する。ただ、周囲の男達は身体の異変になど気付いてはくれない。口の中が空になったと分かった途端、再

び肉棒を突き入れてきた。

びゅぶっ！ どびゆるっ！ びゅぶぽおっ！

「ま、また……んぎゅっ！ ごきゅごきゅうっ！」

またも射精。再びあの甘美な味が広がる。

（の、飲むのっ！ 飲んで……こ、この腔中の化け物も吹き飛ばしてやるんだから！）

今度は口腔に溜める様なこともない。躊躇もなく撃ち放たれた先から飲み干していく。

「んぎゅっ！ おいひい……おいひいのお……」

魔力を回復させるという大義名分が、少女悪魔の行為を更に積極的なものと変えていた。自らの口腔内にこびりついた白濁液を、最後の一滴まで舌で絡め取ろうとする。本能に支配された動き。もっと欲しいと自然に瞳が訴える。同時に媚びるように、金眼の魔神は肉茎に舌をねつとりと絡みつかせた。

肉先を何度も舐め、頬を窄めて肉茎を吸う。上目遣いで男を見つめながら、首を前後に振った。同時に陰囊にも手を伸ばす。優しく男のタマ袋を指先で弄びながら、時には肉棒の裏筋を舌先でなぞっていった。ビクビクと肉棒が悦びに震える。

「ンチュッ……ほら、射精しなさい。ザーメンを射精すの。わ、私にいっぱい飲ませなさい。あんたの汚い牡汁を、私の口の中にビュービュー射精すの」

これを見てファルシアは男に射精を求める言葉を口にする。

（必要だから。こ、これは必要な行為だから……）

何度も言い訳しながら「ほら、肉ストローから特濃ミルクを沢山飲ませて」と男に媚びた。

「こ、このド淫乱め！ うあつ、で、射精るっ!!」

どびゅっ、びゅばっ、どびゅばああっ！

「あはっ♥」

途端に男は射精を開始する。大量の白濁液が飛び散り、ファルシアの顔を汚した。金眼の魔神はそれを指で掬い取り、クチュクチュと舐める。

「駄目じゃない。ちゃんと飲ませてよ。ほら、あんたは私にちゃんとくっさいチンポ汁を飲ませてくれるわよね」

美味しそうに指を吸いながら、食欲に次の男へと視線を向ける。男の肉棒は、ファルシアの細腕くらいの太さはあったかも知れない。魔神はその肉棒を両手で握むと、グチュッと肉先にキスをした。同時に顎が外れてしまうのではないかというくらいに、大きく口を開く。

「んごっ……おぼっ……こ、こはっ……お、おつきしゅぎ、こ、これくらいの大きさなら、ザーメンパックできるくらいにセーシが射精するんでしょ？ んじゅっ、んぼっんぼおっ」  
両手で肉竿を抜きながら、頬を窄めてバキュームフェラを行う。

「ぐ、い、いいぞ。た、たっぷり射精してやるからなっ!!」

これに男はすぐに限界を迎えた。肉棒が震え、白濁液が撃ち放たれる。ドクンドクンッ

と痙攣するペニス。

「んびよっ!? お、こひっ——んげっ、んぶええええっ!!」

凄まじい勢いを持った射精だった。すぐに口腔はいっぱいになってしまふ。口で受け止めきれなかった分の白濁液が、べつとりと顔に貼りついた。本当にザーメンパックでもされたかのような量。

「あ、んえ、お、おいひい……♡ と、特濃じゃーめん、んぎゅつくちゅ……しゅ、しゅごく、おいひいのお♡」

汚液に塗れながら、ファルシアは幸せそうに笑った。

「も、もっろ、ちょうらい♡ あんた達のセーシを飲ませなさい」

それだけでは満足しない。更に男達に媚びる目線を向ける。

「あ、ああ! 飲ませてやるよっ!!」

男達の我慢も限界だった。一斉にファルシアに肉先を向けてくる。

「お……ほおっ! おあっ! も、もつとせ、セーシ、よ、よこしな、さっいよっ! ひはーひはーひはーっ! ま、また射精る? あんっ?」

一体何人分の精液を飲んだらうか? 最早ファルシアには分からなくなっていた。口だけでなく、全身が白濁液に塗れている。それでもファルシアは食欲に舌を動かして肉棒を舐め、腕で肉竿を扱き、尻尾の先で男の鈴口を舐っていた。



#### 第四話 肉の宴に堕ちる王女

同時にナメクジの様な妖魔の口に当たると思われる部分が開いた。粘膜に覆われた肉壁が覗く。吐き気を催させる臭いが漂ってきた。

(わ、私を喰うつもり!?)

有り得ない。たかが妖魔が魔神を喰らうなど、あつてはならないことだった。

「や、いやっ! いやあああつ!! こんな……の、やめ、やめさせなさいいっ!」

ファルシアは絶叫を上げ、羽を、尻尾を、全身を振って逃れようとする。しかし、妖魔を振り払えるだけの力は、まるで戻っていないかった。

「グエッグエッグエッ!」

暴れるファルシアの姿に、妖魔が笑う。あまりに不気味過ぎる笑い声だった。そのままこちらの身体を自分の口元へと運び出す。

「やだ、私は……ま、魔王になる……魔王なのよ……こ、こんな……こんなの……許されない……許されないのよお!!」

抵抗もできずに、自身の権威を振りかざす。あまりに滑稽過ぎる言葉だった。当然妖魔は止まらない。

「すげー! ファルシアの躍り食いだ!」

「喰ってみたら美味そう……なわけねー! ザーメン塗れできたねーっつの!」

あまりに非日常的過ぎる光景。が、これを見る生徒達は笑っていた。男子生徒も女生徒も、こちらを指さし、歓喜の表情を浮かべている。が、それを気にする余裕はファルシア

にはなかった。

徐々に妖魔の口が近付いてくる。鼻を突く臭いもより濃くなっていく。

(いや、こんなの……こんなこと……)

妖魔に喰われる——想像するだけで、ファルシアの身は震えた。

「いや……いやあ……」

「ハァァァァァァ」

下等生物が与えられた餌に歓喜の息を漏らす。

「だ……め。や、やめ、やめて……やめ、さ、せて……お、おね、お願いだから。お願いだから、こんなのはやめさせなさいよお……」

この時、金眼の魔神は生まれて初めて恐怖を覚えた。カタカタと歯が音を立てる。相手が見下してきた人間だということも忘れ、ファルシアはエリスに対して懇願していた。

「……やめさせて……？ 頼み方が悪い」

が、敵は聞き入れない。

「そうだぞ。お願いなら言い方つてもものがあるだろ」

同時に生徒達が囁し立てる様に口を開いた。

(に、人間があ!! で、でも……こ、このままじゃ……わ、私は……)

妖魔に喰われ、捕食されてしまうだろう。想像しただけで、ぶつぶつと鳥肌が立った。ジワリッと瞳に涙さえ浮かぶ。

（やだ、死にたくない……死にたくないのお……）

敵に頭を下げるくらいなら、死ぬほうがマシだと思っていた。だが、現実を突きつけられたファルシアは、恐怖を覚える。死にたくない。だから――。

「ゆ、許して……助けて、助けて下さい……。死にたく、死にたくない……私……死にたくないのお……ごめんなさい。ごめんなさいい……」

涙が零れ落ちる。プライドをかなぐり捨て、許しを請うた。

「おあつ！ マジで謝ったぞ」

「許して下さいだってよ。ぎやははっ」

人間が笑う。その声が、心に深く突き刺さった。彼らと同じくエリスも微笑む。

「よく言えた」

こちらを褒めてきたりもした。

「じ、じゃあ……」

僅かな希望をファルシアは覚える。しかし、そんなものは甘い考えでしかない。

「でも駄目。お前の魔力は私のもの」

あっさりと希望は打ち砕かれ、ぶらりと垂れ下がった両手が、ゆっくりと妖魔の口の中へと――。

「ひっ！ や、いやっ！ いやああああつ!!」

少女の様な悲鳴が漏れる。誇り高い魔神の見せる姿ではなかった。



ただ、そんな悲鳴を上げたところで妖魔は止まらない。手だけではなく、頭から身体まで、妖魔の口腔に飲み込まれていく。ムワツとした生温かさが、ファルシアの全身を包み込んでいった。

「ひいっ！ ひいひいっ！」

恐怖に引きつる。

じよぼっ！ じよぼぼぼぼっ！

失禁。下腹部が熱くなっていく。が、それを気にする余裕はない。自分が尿を漏らしているという事実を認識するよりも早く、妖魔の舌らしきものが、ファルシアの肢体に絡みついてきた。

「ひっ！ やっ！ く、臭いっ！」

腰に赤い柔肉が絡む。妖魔の唾液が全身を濡らしていった。ぬるま湯に浸かっているような感覚を覚える。そのまま舌が全身を舐め回してきた。

じゅぶっ！ ぐじゅぶっ！ ぶじゅるるるっ！

「んひっ！ あっ！ 気持ちわ——んあああっ！」

巨大な舌が金眼の魔神を弄ぶ。口腔粘膜が全身を包み込み、全身が肉壁に圧迫された。

「あつゅっ！ 熱いひいっ！ ひっ、ひーひーひーひー」

熱液につけられているような感覚を覚える。肌がちりちりと焼かれているように感じた。その感覚を肉体は快楽として覚えてしまう。

ざらついた舌の表面が、脇の下から胸を舐め上げ、頬を擦る。同時に口腔内でも伸びる触手が、太股に絡みつき、ぶじゅぐつと容赦なく膣内に先端部を挿入してきた。

「くひっ！ は、挿入って——んひっ！ おっき、おっきくて、こ、こんなつの……あっあっあっ!!」

身体を内部から押し開かれるような感覚が走る。何とか声を押し殺そうとするが、どうしても甘い嬌声が漏れてしまった。全身を舌で舐め回され、転がされる。

「おぼっ！ おほっ、ほああああっ」

じゅずっ！ ぐじゅずっ！ じゅぶるうっ！

膣内を這い回る触手。全身を押し潰そうとする肉壁。身体中を締め上げる舌。その舌からより多くの触手が分岐し、乳頭や淫核を責め立てる。

「うひっ！ ひっひおっ！ そ、それいじよ、うはっ！ ほおおっ!!」

自分の身に何が起きているかさえも理解できない。唯一認識できていることは、これが異様なまでに気持ちがいいということだった。

ぶじゅぐつ！ じゅぐつ！ ぐじゅるうっ！

「おひよっ！ ひっ！ ひっひっひんん!!」

二本、三本と新たな触手が膣壁を押し開く。

（や、破れる……私のマンコが破られるっ！ あっあーあーあー、だ、駄目だ！ こんな駄目なのに……た、耐えられない……）

瞳が蕩ける。

「おひっ……んんんんっ！」

気持ちよさなど感じてはいけない。敵に屈するなど誇り高きレリアリアの当主がすべきことではない。だというのに、全身から力が抜けていく。

じよぼっ、じよぼろおおお……。

「お、おしっこ出てるう……」

再びの失禁。最早我慢することなどできない。そんなファルシアの肉体に絡みついた舌の表面に、吸盤の様なものが現れ、吸いついてくる。

(な、なに……ひっ！)

「す、吸われるっ！ なんか吸われるう」

じゅぎゅっ！ ちゅずるるる……。

始まったのは吸引行動だった。吸いついた吸盤だけでなく、口腔全体がファルシアの中から何かを吸い出していく。

「ほへっ、ひへ、ひへへへ……」

全身を吸引され、反射的に情けない悲鳴を漏らしてしまう。更に追い打ちをかけるように、絡んだ舌の先端部が、肛門に潜り込み始めた。

「やつ！ ま、またそ、そこ!? そ、そこは駄目！ 駄目なの！ んひっ、んひいひいっ」  
止めることなどできはしない。

ミジッ！ ミジミジミジイッ！！

「ひぎっ！ おっ！ ほおっ！ おっおっおっ！ おほおおおっ！」

ファルシアの言葉が届く筈もなかった。肛門を押し広げ、先程尻に突き込まれた触手と同様、いや、それ以上の太さを持った舌が、胎内に潜り込んでくる。先程散々流し込まれた白濁液が潤滑液になっているとはいえ、普通の人間であれば先端が挿入されただけで、身体が引き裂かれてしまっていたことだろう。

「おっき、おっきすぎっ！ いっきが、いぎがつまっ！ ほひっ！ ひはーひはーひはー」

（二つになる。私の身体が裂かれるう。なのに、どうして？ どうしてこんなのが気持ちいいの!?)

全身を駆け巡る苦しみ。直腸を圧迫される感覚に息が詰まるような感覚さえ覚える。だというのに、肛門内を触手に這いずり回られると、排便時にも似た快感をファルシアは覚えてしまっていた。最早快楽を否定し続けることはできない。

『気持ちいい？ 妖魔は魔力を吸う代わりに、女に最高の快楽を与えてくれる』  
脳内にエリスの言葉が響く。

「ちがつきもっ、ちよくな——んほっ、ほおっ、んほおおおっ！ い、いいっ！ よuzziるのおおっ！！ ひっひいいいいっ！」

ファルシアは必死に首を横に振ってその言葉を否定しようとした。だが、否定の言葉は



途中で嬌声に掻き消されてしまう。

そんなファルシアを嘲笑うように妖魔の舌は直腸に侵入しただけでなく、更に肉奥まで突き進む。ファルシアの下腹部を不気味な程に膨れ上がらせながら、触手は腸から胃にまで入り込んできた。

ぶごっ！　ぶじゅごっ！

「おほっ！　は、はいってる！　お、おなが、おながのなつかに、お、おつぎのはいつでるうっ!!」

腹が破裂してしまうのではないかという程の圧迫感を覚える。ただ、それは決して苦しみではなかった。触手と肉壁が触れあう部分が熱い。熱気が性感となり、耐え難い快楽をファルシアに与える。

「おっおおっ！　熱い、私のお腹が熱いいっ！」

腔内でも舌が吸盤を展開する。内臓壁に妖魔の肉が食いつき、体内でも吸引が始まった。じゅぎゅっ！　ぎゅじゅるるるうっ!!

（吸われてるう。お腹の、なつかまで、吸われてるのおっ!!　おっおっ、おほおっ!）

吸引だけでは終わらない。胃の内部に潜り込んだ舌が、より奥に先端部を進め始める。

「も、もうだつめ、そ、それ以上はむっり！　無理なのっ！　も、もうばいらないっ！　おっ！　おごっ！　うえおっ！　うげええ!!」

肛門から胃まで貫いただけでは、妖魔は満足せず、食道にまで侵食してきた。塞がれる

喉奥。当然の様に吐き気が込み上げ、金眼の魔神は妖魔の口腔内に吐瀉をした。妖魔はそれを美味そうに喰らう。そして、よりファルシアの肉体を楽しむ為に、舌を前へと進めた。白濁液による圧迫とは比べものにならない苦しみが身を襲う。

「おっ！ こ、こほっ！ ほおっ！ おぼおっ！」

（し、死ぬ！ 死ぬ、死ぬううっ！）

比喩ではなく、全身を肉棒で貫かれていく。感じる死への恐怖。ただ、それ以上に恐ろしかったのは、舌に犯されれば犯される程感じてしまう自分の肉体だった。

（死ぬのに、このままじゃ死ぬのに、何で？ 何で私の身体はこんな……気持ちいいのお!? きもちよぐで、きもちよしゆぎで、じんじやう。ばだひじんじやうのおっ!!）

思考が渦を巻く、自分でも何を考えているか分からない。

ファルシアは時折肢体を痙攣させると、プシュッと膣口から愛液を溢れ出させた。

「お、ぎ、ぎでっる！ の、どの、おく、まで……きでる……い、いやら、いやら……こんなのいやらよ……」

ボコリッと細首が膨れ上がる。口元まで触手に犯されているという事実。その現実、ポロポロと子供の様にファルシアは涙を流した。

「ご、ごめんなしい。ごめんなしい……」

遂には何度も謝罪の言葉まで口にする。恐ろしかった。目の前にある死が——下等生物などに喰われて死んでしまうことが何よりも怖かった。

「むっ！ も、こ、これ以上は……おごつ！ うご、のっど、喉が、塞がって……おっ  
おっおぼっ！」

その恐怖を後押しするように、再び湧き上がる吐き気。喉奥で化け物の舌が蠢いている  
のが分かる。

自分が壊されてしまう様に感じた。それにすら愉悦を覚えてしまう自分が恐ろしかった。  
「た、たしゆけて……いやらの……こわひの……たしゆけて、死にたくない……わらひし  
にたくらいの……たしゆけて……たしゆけてよ、東子お……」

一瞬気弱な顔をした下僕の笑顔が脳裏に浮かぶ。矜持をかなぐり捨て、救いを求めている。  
た。だが、彼女を救ってくれるものは存在しない。

「も、もうま、魔王になろうとなんて、お、おもいましえん。え、えりすしやまを、こ、  
殺そうとなんておもいましえん。だ、だから、ゆ、ゆるひて、ひるひてください。た、た  
しゆけ——」

刹那——。

じゅぶごつ！ ぼごおつ！

「おぼっ！ あ、あつな、わ、わだじのか、からだに、お。おっぎな、あ、あながあいで  
ぶうっ!! ぶぼっ、うぶおつ、んびょおおおおつ！」

ファルシアの口腔から舌の先端部が姿を現す。魔神の肉体は、完全に貫通してしまつて  
いた。



この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**

# あとみっく文庫最新刊

ちょっと大人のライトノベル / 毎月下旬ぞくぞく刊行中!! 定価/本体690円(税込)



全国書店で  
好評  
発売中

カノジョ  
少年に封じられた  
とき  
魔神降臨の刻!

玲音と冬馬、交差する2人の物語、  
クライマックス  
衝撃の最終章へ!

## 魔海少女 ルルイエ・ルル2

小説:羽沢向 / 挿絵:ピエール☆よしお

ピルグリムメイデンⅢ 復讐の魔神

「小説…狩野景 / 挿絵…ぼち。」



全国書店で  
好評  
発売中

お腹の子供のパパを探してます!!  
ポテ腹魔法少女が父親探しにひたすらH!

魔法妊婦ハラマセ∞ハラスメント

「小説…上田ながの / 挿絵…瀬上大輔」



全国書店で  
好評  
発売中

クトゥルフの娘たちが  
学園祭でメイドさんに変身!?  
ルルたちに新たな邪神が這い寄る!

既刊LINEUP  
全国書店で好評発売中

- 山崎学園戦姫ノブナガ! ①～③
- BLANGEL 輪になつて踊る悪魔の夜
- 不死の吸血鬼ガドSのご主人様を募集しようです

- 思春期なアダム ①～③
- 呪詛遊戯師【カースイーター】
- 女幹部メル様のセカイ征服計画

- 借金お嬢小姐 ①～③
- 無敵の短騎士ガドMに目覚めたようです
- 宇宙海賊学園ブラックキャット

© KTC - KILL TIME COMMUNICATION

検索 戻る 進む 中止 更新 ホーム 自動入力 プリント メール

アドレス: http://ktcom.jp/

**KTC**  
KILL TIME COMMUNICATION

http://ktcom.jp

二次元ドリームノベルズ  
二次元ドリーム文庫  
二次元ドリームマガジン

会社概要 資料請求 ご利用方法 通販問合せ

お知らせ

二次元ドリームフェア開催中! お買い上げのお客様先着で特製クリア!

**二次元ドリームフェア**  
2D DREAM FAIR

国内最大級のダウンロードショップ! ゲームのダウンロード販売はこちらからどうぞ!

DLsite.com

国内最大級のダウンロードショップ! ゲームのダウンロード販売はこちらからどうぞ!

買い物かご  
現在の合計: 0円  
更新

# キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

**http://ktcom.jp/**

- 雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
- 二次元ドリームマガジン・コミックアンリアル**のバックナンバー**も買えるよ!
- ジャンル別**で作品も選べて超便利!
- 二次元編集部**の愉快的Blog**も更新中!

5/31日 09:11

**ヴァルキリエ**  
VALKYRIE



<http://www.comic-alkyrie.com/>

KTCの戦うヒロインオンライン漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

**cranberry**  
STRAWBERRY



<http://www.cran-berry.com/>

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

**mille-feuille**  
ミルフィーユ



<http://www.mille-feuille.jp/>

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

**モバイル二次元  
ドリーム**



<http://www.2d-dream.jp/>



二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!